

友の会通信

第11号

2011年3月1日(火)

葛飾図書館友の会

編集 広報委員会

発行責任者 中里 隆二

中央図書館で友の会企画特集展示第3弾開催

「つげ義春を知っていますか? ~1960・70年代のマンガとカルチャー」

葛飾で苦しく貧しい少年期

中央図書館〈かつしかコーナー〉の一角では、本紙最新号が掲示され、小会の活動の一つであるスクラップブック『葛飾ニュース情報』が公開されています。

昨秋からこのコーナーの新たな顔として加わったのが友の会企画による特集展示。2月6日~3月下旬予定の第3弾は、葛飾で苦しく貧しい少年期を過ごしながらマンガ家を志し、1970年前後に一大ブームを巻き起こしたつげ義春が中心テーマです。

『ねじ式』『無能の人』などによって、他分野の人々にも大きな衝撃と影響を与え、創作活動が休止されてから20年以上を経た今日でも多くの熱烈なファンをもちつづけている「つげ義春」。その人をこともあろうに「知っていますか?」とは、ご本人にも読者のみなさまにも恐縮の至りではありますが、「知っている」方々には特殊にして普遍的なつげ作品の魅力にあらためて目を向けていただき、「名前だけは…」 「ツゲヨシハルって何?」という方々にはとにかく手に取ってみてくださいと願うばかりです(展示資料は通常の手続きで借りられます)。



明石家さんまのポスターも展示



友の会では特集展示としてこれまで、「プロレスを知る・楽しむ・考える」(11月1日~12月13日)、「ゆ〜年くる年 しあわせて、何だっけ?」(12月14日~2月5日)を開催してきました。展示のベースは友の会会員による企画・選書・設営ですが、資料確保では中央図書館と各地域・地区図書館の支援をいただき、「プロレス〜」では岡村正史氏(プロレス研究家)、「しあわせて〜」では『出版ダイジェスト』(出版粋会)に選書面での協力をお願いしました。また、「しあわせて〜」ではキッコーマン食品、今回の「つげ義春〜」では筑摩書房から広告資料の提供を受けています。諸作業を通じて、本は読まれるものであるだけでなく、人と人をつないでくれるものなのだと思えるつくづく実感するしだいです。

(イベント委員会)

第4回「葛飾図書館友の会」総会開催のお知らせ

「友の会」はこの4月でほぼ4年目の活動に入ります。これまで各種委員会によるさまざまなイベント・講演会、広報紙の発行などを行ってきています。下記の日程で第4回総会を開催します。総会後はミニ講演会や交流会などを企画・検討中です。皆さんの参加と「友の会」への加入をお待ちしています。なお詳細が決定次第、ポスター、チラシなどでお伝えします。

葛飾図書館友の会第4回総会

日時(予定) 平成23年4月23日(土) 午後2時~

場所 葛飾区立中央図書館(葛飾区金町6-2-1 ヴィナシス金町3階)会議室1



思いもよらぬ本と出会えるいいチャンス

第5回キーワード読書会報告 テーマ『幸福』

1月18日(火)で第5回を迎えたキーワード読書会のテーマは『幸福』。これは“ゆく年くる年 しあわせて、何だっけ?”(イベント委員会主催)の特別展示に協賛したもの。

毎回思いもよらぬ本が持ち寄られ、ひとつのキーワードから想起された様々な記憶や知識のすばらしさに驚かされる読書会ですが、今回も格調高きフランス文学から「しばわんこ」までと意表をついた選定の数々でした。『幸福』はなかなか重いテーマ

でした。最初の本『聖母の軽業師』の紹介から、幸福とは自己の人生をどう捉えるのかという問題なのではという問いが提起されました。夢と愛、信仰心に至り、不幸はあるけれど幸せはないのかもしれないという発言や、不幸



	書名	著者	出版社
①	聖母の軽業師	アナトール・フランス	ちくま文学の森
②	涙をたらした神	吉野せい	彌生書房
③	幸福論	ハートランド・ラッセル	岩波文庫
④	しばわんこの和のこころ	川浦良枝	白泉社
⑤	ユートピア	トマス・モア	岩波文庫
⑥	忘れられた日本人	宮本常一	岩波文庫
⑦	私は日本のこころが好き	加藤恭子	出窓社
⑧	今日も映画日和	和田誠・他	文藝春秋

をなくすことが幸福につながるのだという断定があったり、ありふれた生活こそが幸福なのではなどと、白熱した議論となりましたが、最後は『今日も映画日和』の映画の話から懐かしい昔の思い出語りで終わりました。

読書会というちょっと身構えてしまいますが、テーマに沿った本を紹介するだけで気軽に参加でき、その上、人が読んで面白かった本とめぐりあえる素敵な機会です。終了後に次のテーマを何にするかを決めるのもまた楽しいひと時。次回は『わかれ』。本にまつわるどんな物語が繰り広げられるのか、ぜひ参加して味わってください。

立石図書館が6月下旬にリニューアルオープン

リサイクル清掃関連施設との複合で

生涯学習と3Rがテーマの活動拠点に

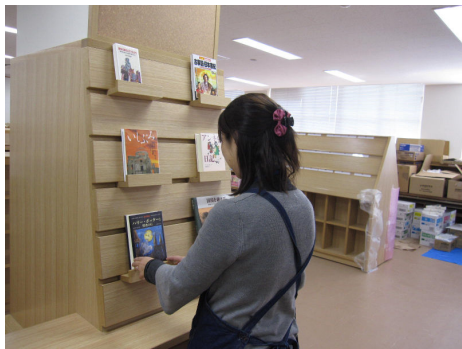


葛飾区立立石図書館及びリサイクル清掃関連施設 完成予想図

京成立石駅のそばにある立石図書館が今年6月下旬にリニューアルオープンされます。区内で最初に出来たこの図書館は40年近くも前に改装しましたが、新しく4階建てのリサイクル清掃関連施設との複合施設「かつしかエコライフプラザ」の中に延べ約1,500平米の図書館として生まれ変わります。蔵書は約7万冊を予定し、生涯教育や3つのR(リデュース・リユース・リサイクル)をテーマとした活動の場に、そして環境関係やITを利用したパソコンコーナーを充実させるといいます。

中央図書館とは違い、委託はせず、すべて職員で窓口・レファレンス・児童サービスなどの図書館業務を担当し、ほぼ中央図書館と同じ開館時間や休館日に。1階は総合カウンターや予約資料・CD・新聞雑誌のコーナー、2階は児童室、3階はほぼ全面が一般室・YAやビジネス支援コーナーがある一般開架室と地域資料コーナー、そして閲覧室が4階という図書館。自動貸出機4台、簡易返却機2台が、1階にはベンチ席と合わせて18、児童室26、一般室31、そして閲覧室には60席がそれぞれ設けられ、またビジネスパソコンコーナーにはインターネット端末も10台、“おはなしのへや”や対面朗読室も設置される予定とのこと。残念ながら会議室はなく、研修室は「エコライフプラザ」の施設となるために、利用には事前予約が必要で、基本的には有料。複合施設の性格上、そして4階にわたるといふ構造が少々気になりますが、情報の交流拠点と地域活性化の場としての立石図書館の開館が待たれます。

奥戸地区図書館4月2日オープン



めくもりの木製書架がよい子を待っています

4月2日の土曜日午後1時に奥戸地区図書館が新規オープンします。ロケーションは森永乳業の道路向いで南奥戸小学校敷地内の角。旧図工室と音楽室を改装したため、地域図書館に比べ広さに制約のあるスペースを、高さを押さえた木製書架によって見渡しがよく広がりをも感じさせています。構造上動かせない柱には書架と作りつけベンチ設置など、多彩なアイデア・工夫が満載です。

児童室の雪だるま型テーブルも可愛くユニーク。絵本コーナーの床はコルク敷きで、床暖房とはさすがに最新館です。なおオープン前の3月25日～31日には新規の利用カード登録も受付。4月3日（日）午後2時から絵本作家・飯野和好氏の講演会も予定とのことです。

新装した新宿図書センターはすでに開館

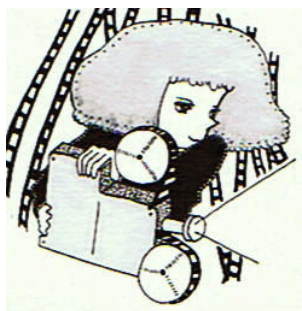
館内は明るく、30席の閲覧室はゆったり

新宿図書センターが1月から新装開館しています。入り口には総合カウンターと広がった新聞・雑誌コーナーがあり、左手には児童室と拡張された一般図書スペース、さらには30席の閲覧室が新設されました。訪問した日は近くの保育園から園児が来館して一人ひとり絵本を借りていきました。蔵書数を増やすために8段ある書棚は壁の色と合わせた白で統一。まだ書棚のスペースに余裕があり、書籍を今後順次追加していくとのこと。とても明るい図書館です。



このセンターの2階には閉架書庫があり、図書検索で“一般保存庫”と表記された書籍類はここにあるようで、予約や修理がはいってなければ即貸出が可能。そして地下にある区内唯一の食堂も元気に営業中です。閲覧室がゆったりと落ち着けそうな感じで、区内図書館の中ではちょっとした“穴場”かもしれません。一度行ってみたいはいかがですか？

新たに「16ミリ映画を楽しむ会」が発足 “古きよき時代のフィルムを新しい図書館で”



中央図書館に団体登録し、開館1周年記念行事にも参加したボランティアサークル「ラッキー会」が中心となって活動していた16ミリ映画の上映チームが、正式に「友の会」の新しい委員会として発足しました。“古きよき時代のフィルムを後世に残す・旧文部省推薦・性描写なし、いじめをなくし、社会から取り残されて孤立した若者・高齢者に少しでも時間をさいて実社会の現実を見てもらおう”という基本理念のこの会。

DVDにはない雰囲気を持つ16ミリ映画は劇映画はもちろん、ニュースやアニメ、障害者向け字幕付きのものなど多種にわたり、音の出る映写機で、フィルムに傷があったり、コマがずれたりする予想外の楽しみもあるといいます。赤川委員長は「今まで場所の確保に時間を要することが度々あったが、来館者と一緒に鑑賞するのは図書館利用の推進にも役立つと思うので、仲間と一緒に努力したい」と述べています。

偶数月の第3土曜日午後定期上映

借用先の都立多摩図書館だけでも約9千巻を保有する16ミリ映画。その貸出・利用条件は厳しく、上映には様々な困難さを乗り越えていく必要が生じるかもしれませんが、すでに年間を通してフィルムは確保しており、偶数月の第3土曜日の午後2時から定期的な開催するこの委員会の活躍を期待しましょう。

運営委員の募集も始まり、すでに2月26日には『花いちもんめ』が上映されています。

心にのこる私の一冊 ⑦ “心にのこる一冊に出会う楽しみ”

清水 一夫

心に残る一冊と言われハタと困った。印象に残る本、思い入れのある本、多々あるが一冊と言われると迷う。十代の多感な頃、石坂洋次郎の「若い人」江波恵子に恋をし、奥浩平の「青春の墓標」、高野悦子の「二十歳の原点」に心情を通わせ、佐江衆一の初期の頃の作品「太陽よ、怒りを照らせ」「闇の向うへ跳ぶ者は」不条理に怒りを募らせ、五味川純平の「戦争と人間」膨大な長編を読みふけり、小林秀雄の知に圧倒され、カフカ、ニーチェは解らず。その頃の若者とと同じく心情的には「左」の読書傾向が強かったように思う。それでも何故か三島由紀夫の本は読んでいた。豊饒の海の全四巻を読み終えた時、ああこの人はもう書く事は書ききった、との思いを抱いた。数日後、衝撃的な三島割腹自殺のニュースが流れた。賛否はいろいろあると思うが、あれが三島なりの男の美学の完結の仕方だったように思う。我々凡人が考えても自衛隊がクーデター加担する可能性は万に一つも無かった。活字文化の中で育った人間にとって社会との繋がり的一步として本との出会いがある。社会を知る、自分を知る、本との出会いは貴重なものだったと思う。インターネットがこれほど発達するなど考えもしなかった。受け手でしかなかった時代から、誰でも発信者に成れる時代へ、思考は大きく変化している。活字文化も変容を迫られている。例えば、印象に残る本は多感な人生に悩み、迷っていた時期に出会った本が圧倒的に多い。本に接する、読み手としての心構えも今では希薄になっている。図書館で本を借り、読み出し、あれ、この本読んだ事がある。悲しい思いをする事がある。最近では昔読んだ本をもう一度読んでみようと考えている。その時、どんな思いを抱くか、今から楽しみにしている。福永武彦の「海市」、「豊饒の海」も読んで見たい。読み手のその時の心象風景に合った本に出会う、それが心に残る一冊になる。もう出会ったのか、これから出会うのか、楽しみは尽きない。



(しみず・かずお 地域・地区図書館応援チーム委員長)

「葛飾図書館友の会」で一緒に活動してみませんか！

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイデアを少しずつ実現してみませんか？

毎月第3土曜日の午後1時から4時まで中央図書館内で、また従来通り友の会開催イベント時にも直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員は1,000円、賛助会員は1口2,000円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を下記の口座に納入してください。図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、23年度年会費とご記入下さい。これから総会までの入会は次年度会費扱いとなります。振替手数料は銀行窓口では120円、ATMからでは80円です。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。

●問い合わせ・連絡先

中央図書館担当者（玉川さん、吉村さん、清水さん、白井さん）Tel 03-3607-9201

ゆうちょ銀行	口座番号	00100-7-392065
	口座名称	葛飾図書館友の会

面白い本が読みたい。本を開き、最初の頁から此処ではない何処かへ連れて行ってくれる本。電車で読み始めたなら、一時間かかるはずなのに、何故か一瞬のうちに目的地に着いてしまったと思わせてくれる本▼そんな本に巡り会うには結構努力が必要だ。書評誌を定期購読し、年間ランキングの本を見たりしても、自分の心の琴線にふれるような面白い本にはなかなか邂逅できない▼先日、書評家としても知られる児玉清氏の講演会へ行った。氏によれば面白い小説は市民生活が豊かな国でなければ存在できないものだそう。二十以上の作家のお薦め面白小説を原稿を見ることがなく滔々と語った。フィクションを読むことによって初めて現実を把握する想像力が得られるという言葉からも読書とは面白くあれという想いが強く感じられる講演であった▼その中でこれが一番だという作品を読んだ。スウェーデンのミステリー。三部作全六冊があつという間だった。久々に次の頁をめくる悦びに浸った。最後の二冊は、七時間ほど同じ姿勢で読みきった▼生きていくのは楽しい。まだまだこんな本がたくさんこの世にあるはずだ。面白い本たちが図書館で私を待っている。ちなみにこの本はステイグ・ラーソン著『ミレニアム』。

(矢野広報委員)

色えんぴつ